

1. 巻頭寄稿文: ニュースレター第10号を迎えて (亀山 康子:学会電子版ニュースレター編集委員長、国立環境研究所)

本ニュースレターでは、毎号、同学会の中で中心的な役割を果たしてこられた方や、最先端の研究活動をされている方に、巻頭言を寄稿していただきました。お一人お一人の機知に富んだ文章を、編集委員長として、また、一学会員として、わくわくしながら読ませていただきました。

さて、このたび第10号という節目を迎え、どなたに巻頭言を書いていただくかという編集委員会の議論の中で、「編集委員長が書いたらどうか」という声があがりました。今までの執筆者の方々とは比べ物ならず、何日か固辞を続けたのですが、これも委員長の仕事と断念しました。

以上の経緯で、僭越ながら簡単に今までの経緯を振り返りつつ、第10号を迎えた今の感想を書かせていただきます。

ニュースレターを発行しようというアイデアが出されたのは、今から3年前、2008年でした。当時の会長、植田和弘先生(京都大学)が、学会から学会員への情報発信のためのツールの必要性を痛感していました。当時すでに和文誌、英文誌ともに軌道に乗っていましたが、学術誌はあくまで論文掲載を主目的としています。また、メーリングリストも活用されていましたが、こちらは、非学会でも登録可で、学会活動に関する情報提供の場というよりは、学会外を含め広く環境関連活動に関する情報を共有する場として、固有の役割を担っていました。必要とされていたのは、学会から学会員に対して、必要

目次

1. 巻頭寄稿文: ニュースレター10号を迎えて
2. 【お知らせ】
 - (1) 環境経済・政策学会 2011年大会について
 - (2) 震災被害に伴う平成23年度学会費の支払い免除について
 - (3) 環境経済・政策学会の公式雑誌
Environmental Economics and Policy Studies
について
3. 【研究報告】
 - (1) 環境資源経済学会(AERE)第1回年次大会参加報告
 - (2) 欧州環境資源経済学会(EAERE)年次大会報告
 - (3) 第2回東アジア環境資源経済学会大会報告申し込みのお知らせ

不可欠な情報を配信するための手段でした。

同年秋の大会で、電子版ニュースレターの配信が認められました。編集委員として、鷲田豊明先生(上智大学)、有村俊秀先生(上智大学)、栗山浩一先生(京都大学)にご参加いただくことになりました。

最初にとりかかったのは、学会員のメールアドレスに関する最新データのとりまとめです。それまでは、入会時にメールアドレスを事務局に知らせた後、更新するのは個人の自発的な行動に任されていました。入会後に異動があっても、メールアドレスに関するデータは自動的に更新されていませんでした。

学会員の最新メールアドレスデータをそろえる作業には数カ月かかりましたが、栗山先生と学会事務

局のご尽力で、完璧に近いニュースレター配信システムができあがりました。

データ整備作業と並行して、ニュースレター投稿規定を作成しました。毎回末尾に掲載されていますが、投稿資格（学会員に限定とするか）、投稿記事の種類（いくつかのジャンルに分けた方が投稿しやすいし、編集作業も楽になる）、記事の長さ・書式等、について、規定をもうけました。今までのところ、規定に変更はありません。

記念すべき第1号が配信されたのは、2009年2月でした。一部の学会員から「自分のところに配信されない」等のクレームが出ましたが、個々に対処し、第2号以降は大きな問題もなく、定期的に配信できています。年4回の配信のうち、2月と5月は主に学会の体制変更に伴う役員の紹介や、学会関連活動に関するお知らせを中心に扱っています。8月は、秋に学会大会を控え、大会に関するお知らせの周知を目的の一つとしています。11月は、大会の特集号と位置付けています。

春夏秋冬を2回半経験し、本ニュースレターも軌道に乗ってきたと感じ始めています。今後は、学会員にとってより魅力的なものにするための努力が必要だと感じています。

巻頭寄稿文には、今後も、学会内の多様な研究活動を網羅的に紹介できるよう、分野の異なる方に積極的に書いていただきたいと思います。

また、投稿規定を掲載してはいるものの、今までに数えるほどしか投稿いただけなかったことは、残念なことと言えます。編集委員会の営業努力不足の結果といえますが、今後とも、学会員の権利の一つとして、このニュースレターの紙面を活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、第10号に無事辿り着くまでには、多くの方のご支援、ご協力を承りました。多くの方に執筆を依頼してきましたが、ほぼ全員から温かい快諾のお返事をいただき、ほぼ締め切りどおりに原稿を出していただきました。また、編集委員の皆様には、企画段階から草案チェックに至るまで、

時間を割いてご協力いただきました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

2. 【お知らせ】

(1) 環境経済・政策学会 2011年大会について (吉田 謙太郎：2011年大会実行委員長、長崎大学)

本年度の大会は、9月23日（金・祝）・24日（土）に長崎大学環境科学部（文教キャンパス）にて開催いたします。大会受付は8:00開始です。例年より個別報告の開始が30分早まりましたので、早めのご到着をお願いいたします。大会スケジュールは下記のとおりになります。

9月23日（金）

8:00～ 受付

8:30～10:30 パラレルセッション1

10:40～11:40 学会長講演、学会賞授賞式・講演

11:40～12:40 昼食

12:40～14:40 パラレルセッション2

14:50～16:50 パラレルセッション3

17:00～18:00 総会

18:30～20:30 懇親会（ルークプラザホテル）

9月24日（土）

8:00～ 受付

8:30～10:30 パラレルセッション4

10:40～12:40 パラレルセッション5

13:30～17:00 シンポジウム

本年度のシンポジウムのテーマは「エネルギー政策の新機軸と低炭素社会—スマートコミュニティと地域再生—」です。福島第一原発事故が発生する以前から企画していた重要性の高いテーマですが、現在の日本においてさらに喫緊の課題となりました。電力を中心とした日本の今後のエネルギー供給と地域分散化などに関する問題意識に基づき、多角的な視点から議論を行います。

長崎大学・小野隆弘教授による趣旨説明及び島原半島での取り組み紹介の後、東京工業大学・柏木孝

夫教授による基調講演「スマートコミュニティの取組の現状と課題」、京都大学・諸富徹教授による基調講演「スマートコミュニティ構築の政策手法とファイナンス～現状分析と研究展望」が続きます。

その後、柏木孝夫教授、諸富徹教授、阿部力也特任教授（東京大学）、佐藤信利氏（株式会社明電舎）によるパネルディスカッション及び討論があります。

大会前日の22日（木）14:50からは大会公式視察会「エネルギー資源と地域経済：軍艦島の歴史遺産を学ぶ」を実施いたします。軍艦島（端島）は長崎港から30分ほどの洋上に浮かぶ、かつて炭鉱で栄えた廃墟の島です。日本のエネルギー政策の転換の歴史を学ぶ機会となります。軍艦島は世界遺産暫定リストに登録されており、2年前より島の一部において上陸視察が可能となりました。9月6日に一旦受付を締め切らせていただく予定ですので、お早めに大会事務局までご連絡ください。

また、懇親会は日本三大夜景が堪能できる稲佐山の中腹にあるルークプラザホテルにて開催いたします。長崎ならではの雰囲気を楽しめる懇親会をぜひお楽しみください。

（２）東日本大震災で被災された会員への皆様へ：震災被害に伴う平成23年度会費の支払い免除について（細田 衛士：会長）

この度東日本大震災で被災された会員の皆さまおよびご家族の方々、関係の皆さま方に心よりお見舞い申し上げます。環境経済・政策学会理事会は、震災被害の甚大なことに鑑み、震災に遭われた会員の方々につきましては御本人の申し出があった場合平成23年度の会費を免除することを決定いたしました。平成23年度会費が既に納入されております場合、平成24年度会費として充当させて頂くか払い戻しさせて頂くか選択頂くようになっております。

お申し出頂く場合には、学会ホームページにございます所定の申請用紙にしたがって、学協会サポートセンター（〒231-0023 横浜市中区山下町194-502 TEL:045-671-1525, FAX:045-671-1935

e-mail:scs@gakkyokai.jp)までメールないしファックスで平成23年10月末日まで申請して頂くようお願い申し上げます。

皆さま方のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

（３）環境経済・政策学会の公式雑誌 Environmental Economics and Policy Studies について（赤尾 健一：英文誌担当理事）

Environmental Economics and Policy Studies（略してEEPS）は、環境経済・政策学会（Society for Environmental Economics and Policy Studies; 略して一皆さんご存じと思いますが一SEEPS）の公式雑誌として1998年より発行されている国際雑誌です。昨年の夏より、実質的な編集の仕事を、現学会長でありEEPS編集長である細田先生から引き継ぎました早稲田大学の赤尾です。バトンタッチしてほぼ1年、ニューズレター編集部のご依頼に応じて、EEPSの現状や個人的に私が思うことなどをここでお伝えしたく存じます。

今でも鮮明に覚えているのは、SEEPS発足パーティでの細田先生のEEPSにかける意気込みです。「すごく厳しいレフリード・ジャーナルにするから、赤尾さんもよろしく！」編集長の細田先生はMetroeconomica や International Journal of Economic Theory などの国際雑誌の編集委員を歴任され、その知名度と信頼によってこの十年あまりの間EEPSを支えてこられました。細田先生なくして今日のEEPSはなかったということは、さまざまな学会誌の事情を知る者の共通認識であろうと思います。同時に、国際雑誌の競争環境の激化がEEPSをじり貧の状態に追い込んでいたことも事実です。最近では年間4回の発行もおぼつかない状況にありました。細田先生からEEPSを任せられて最初に行ったことはeditorial boardの再編です。まず共編集者として東北大学の馬奈木さん、East West CenterのZhong Xiang Zhang、Chung-Hua Institution for Economic ResearchのDaigee Shaw、Chonbuk National UniversityのYoung Sook Eomを迎え、彼

らの意見を参考に、世界中から環境経済学の権威と活動的な研究者に呼びかけて一級の editorial board を編成しました。また電子化を進め、投稿からパブリッシュまでの時間短縮に努めました。おかげで、今年は前年の倍以上のペースで原稿を集めることができます。またシュプリンガーのオンラインファースト（印刷物に先行する電子出版サイト）には常時2号分程度の論文を掲載できるようになりました。

私が EEPS の課題と考えていることが2つあります。今後 EEPS が順調に発展していく限り、掲載本数の増加は必定です（現在は年間16本掲載）。第1の課題は、それに予算の範囲でどう対応していくかです。投稿を考えられている会員の皆さまには、内容が同じならば短い方が望ましいということを改めてご確認いただければと思います。もう1つの課題は、厳しい雑誌間競争や Social Sciences Citation Index (SSCI) の取得を考えると、一般的な環境経済学雑誌になることが EEPS の生き残り戦略であり、それは多くの SEEPS 会員の需要にも合致するところでもあるわけですが、一方で、それによって SEEPS のもつ学際的色彩が薄められてしまうことです。端的に言えば、学際的な研究を EEPS は受理しますが、それには標準レベル以上の確かな経済分析を含んでいることが必要条件です。一方で、発展途上国、特にアジア地域の環境汚染と資源枯渇問題を思うとき、経世済民の学として、象牙の塔を出て、既存の学問の枠にとらわれない研究もまた歓迎したい気持ちがあります。そのような研究は、special editor による特集号の発行で対応していくことを考えています。これもまた予算との相談が必要ですが。

来年度から、EEPS は SEEPS とともに East Asian Association of Environmental and Resource Economics の公式ジャーナルを兼ねることになる予定であり、ますますの発展が期待されます。願わくば、Journal of Environmental Economics and Management や Environmental and Resource Economics と肩を並べるアジア発の環境経済学誌に

なればと考えています。その第一歩として、SSCI の取得が不可欠です。3年後の取得を目指して引用実績を積んでいきたいと思っています。SEEPS 会員の皆さまへ、出版倫理に抵触しない程度の緩やかなお願いなのですが、論文を書くときは是非、EEPS に引用できそうな論文がないかチェックしてみてください（注）。

最後に、私自身一投稿者の立場に立つて思うことは、受理されるかどうかは別として、役に立つ親切なレフリースレポーターが返ってくる雑誌は大変ありがたい、信頼と評価も高いことです。インパクトファクターのような客観的な指標での評価とともに、EEPS が投稿者の方々にそのような印象を与える雑誌となるように心がけたいと考えています。

注：2010年以降の巻号は、環境経済・政策学会 HP の会員専用ページから Springer のサイトに入ることによって DL できます。また、それ以前の号も含めて、所属機関が購読していれば、EBSCO Business Source Complete と ABI/INFORM Complete から電子版を DL できます。

3. 【研究報告】

(1) 環境資源経済学会(AERE)第1回年次大会参加報告（柘植 隆宏：会員、甲南大学）

アメリカの環境資源経済学会(AERE)の第1回年次大会が、ワシントン州シアトルのルネッサンス・シアトル・ホテルで6月9日から10日に開催されました。600件近い申請の中から選ばれた約270件が、一般セッション、スポンサーセッション、ポスターセッションのいずれかで報告されました。一般セッションとしては、環境資源経済学のほぼすべての研究テーマをカバーする63のセッションが準備されました。また、スポンサーセッションは、都市の環境問題に焦点を当てたものでした。

私は、共著者によるものも含めると3件の報告を行いました。1件目は Topics in Recreation Modelling I のセッションで栗山浩一氏（京都大学）

が報告された Kuriyama, K., Shoji, Y. and Tsuge, T. “Estimating Value of Mortality Risk Reduction Using the Kuhn-Tucker Model: An Application to Recreation Demand”です。これはクーンタッカーモデルを用いて自然公園における遭難や事故による死亡リスクに対する選好を把握し、確率的生命価値 (VSL) を推計したもので、フロアの反応も上々でした。2 件目はポスターセッションで中野牧子氏 (名古屋大学) が発表された Nakano, M. and Tsuge, T. “The Possibility of Socially Responsible Investment in Japan: A Study on Investors’ Preference about Corporate Social Responsibility”です。これは CSR に対する投資家の選好を選択実験により把握したものです。3 件目は同じくポスターセッションで私が発表した Tsuge, T., Shoji, Y. and Kuriyama, K. “Applying A Familiarity-based Choice Sets Approach to the Kuhn-Tucker Model”です。これは回答者にとって親しみのあるサイトのみで選択セットを構成する親密型選択セットモデルをクーンタッカーモデルに応用したものです。ポスターセッションの開催時間がランチの時間と重なっていたため、ポスターを見に来る人があまり多くなかったのは残念でしたが、我々の研究に関心を持ってくれた人とゆっくりと議論ができたことは大きな収穫でした。オーラルセッションと比較して、あまり時間を気にせず議論ができる点は、ポスターセッションの魅力だと思います。

大会前日の 8 日には選択実験に関するプレコンファレンスワークショップが開催されました。Jordan Louviere (シドニー工科大学) や Riccardo Scarpa (ワイカト大学) などの著名な研究者が最先端の研究成果を報告しましたが、なかでも Best-Worst Scaling (BWS)に関する報告は興味深いものでした。BWS は複数の選択肢の中から回答者が最良と思うものと最悪と思うものを選択してもらうことで、選択肢の相対的な重要性を明らかにする方法です。シンプルな質問のため回答者の負担が軽く、調査の実施が容易であるだけでなく、簡便な分析方法も開発

されており、使い勝手がよい印象を受けました。表明選好法の新しい手法として受け入れられる可能性があると思います。使い勝手のよさ以外にもこれまでの手法 (特に評定型やペアワイズ型のコンジョイント分析) と比較して望ましい性質がありますが、詳細はシドニー工科大学 Centre for the Study of Choice のウェブサイト (<http://datasearch.uts.edu.au/censoc/news-events/news-detail.cfm?ItemId=27083>) で公開されている当日の発表資料をご覧ください。

この他にも、Edward Glaeser (ハーバード大学) による基調講演や学会賞の授賞式、さらにオープングレセプションなどが開催され、盛りだくさんの内容でした。プレコンファレンスワークショップを含めても 3 日間の短い期間でしたが、刺激的な大会でした。

次回の大会は、2012 年の 6 月 3 日から 5 日にノースキャロライナ州アッシュビルで開催される予定です。グレートスモーキーマウンテン国立公園も近く魅力的な開催地ですので、関心のある方はご参加ください。

(2) 欧州環境資源経済学会 (EAERE) 年次大会 報告 (横尾 英史 : 会員、国立環境研究所)

2011 年の欧州環境資源経済学会 (EAERE) 年次大会は 6 月 29 日から 7 月 2 日までの期間にイタリアで開催された。会期中を通じてずっと、ローマの我々は好天に恵まれた。会場はローマ大学トール・ヴェルガータ、通称ローマ第二大学である。参加者の多くはローマ市の中心にあるテルミニ駅周辺に宿をとり、地下鉄とバスを乗り継ぎ約 1 時間かけて郊外にある会場へと通った。18 回の歴史を重ねる本大会は今もなお成長を続けている。今回の論文投稿数は 1400 本を超え、このうち報告に至った論文は 585 本であった。参加者はおおよそ 700 名。4 年に一度の世界大会を除けば、環境資源経済学の大会として世界最大のものである。

今年の大会を特徴づけた一点目としては、プレカ

ンファレンスのテーマが「廃棄物の経済学(Waste Economics)」であったことが挙げられよう。毎年、会期の初日には丸一日を使ってある一つのテーマに基づいた研究発表会が催される。前回のテーマは水の経済学(Water Economics)であり、その前は環境と開発(Environment and Development)であった。開催地イタリアは廃棄物管理・リサイクル研究の盛んな土地である。それゆえに今年のテーマが「廃棄物の経済学」となったと考えられるが、これは同じくこの分野で貢献してきた我々日本人にとって大変嬉しい企画であった。今年には碓井健寛氏(創価大学)、沼田大輔氏(福島大学)と筆者の三人がこのプレカンファレンスで報告するという機会に恵まれた。

ここでは11本の報告の中から3本を紹介したい。Roberto Zoboli氏(サクロ・クオーレ・カトリック大学)は「廃棄物の経済学のための三つの研究課題」として、(1)リサイクル政策の導入が廃棄物の発生抑制を「抑制」してはいないか、(2)増加する廃棄物の国際貿易は環境にとって良いか悪いか、(3)止まらないプロダクト・イノベーションは廃棄物を増加させるか、という非常に興味深い問題提起をした。Nick Johnstone氏(OECD)はリサイクル市場を特徴づける要素を列挙することにより、今年のテーマの特徴を浮かび上がらせることに成功した。リサイクル市場とはサーチ・コスト、取引費用や情報の非対称性があり、加えて消費者のリスク回避的行動とプロダクト・デザインに伴う外部性が存在する「特異な市場」であるため、今後ますますの研究が必要であるとした。David Maddison氏(バーミンガム大学)はバーミンガム市のデータを用いて「市内外の、複数かつ現在使用中と閉鎖後の両方の埋立地」を対象としたヘドニック価格法を行い、最終処分場の環境評価手法の技術的進展とその結果を提示した。

今年の大会を特徴づけた二点目として挙げられるのは、「割引率の理論的研究」への注目度の高さであろう。その象徴が、今年のErik Kempe賞論文である。この賞は二年に一度、過去二年間に出版された中から最も優れた環境資源経済学の論文をこの学会

が表彰する。今回はChristian Gollier氏(トゥールーズ・スクール・オブ・エコノミクス)とMartin Weitzman氏(ハーバード大学)の共著論文がその栄光に輝いた。これは両氏が数年来続けてきた、将来の不確実性を考慮した上での適切な割引率の研究の集大成といえるものである。加えて、今年のDavid Pearce講義には、同じく割引率の研究で2007年のErik Kempe賞を受賞している、ノーベル経済学賞受賞者のEric Maskin氏(プリンストン高等研究所)が招かれた。これら影響もあってか、パラレルセッション「割引I」にはおよそ70名の観衆が集まった。このセッションにおいては阪本浩章氏(京都大学大学院)が世代間衡平性の条件を満たした割引率についての報告を行い、討論者のGollier氏から称賛を受けた。

このローマ大会は素晴らしソーシャル・イベントに恵まれた大会でもあった。懇親会は16世紀に教皇ユリウス三世の別荘として建てられたヴィラ・ジュリア国立博物館の中庭にテーブルを並べて行われた。そして、圧巻はカラカラ浴場にて催された送別会である。ここでは、立食パーティの後にオーケストラによる生演奏を楽しむこともできた。悠久の歴史を持つ浴場の壁を背景に奏でられた美しい音楽とそれに合わせて投影された芸術的な映像は我々の記憶に深く刻まれたことだろう。

次回大会は2012年6月、これもまた歴史ある都市、チェコ共和国のプラハにて開催される。

(3) 第2回東アジア環境資源経済学会大会の報告申し込みのお知らせ(森 晶寿: 理事、京都大学)

東アジア環境資源経済学会(East Asian Association of Environmental and Resource Economics)では、第2回学会大会を、2012年2月3・4日に、インドネシア・バンドンのパディージャラン大学経済学部(Padjadjaran University)で開催します。報告申し込みを下記の要領にて開始しております。報告を希望される方は、下記の要領に従って申し込みいただきますようご案内申し上げます。

記

- 1 申込・要旨提出期限 2011年9月1日(木)
- 2 申し込みウェブサイト www.eaaere2012.org
- 3 発表論題 上記の大会運営ウェブサイトに記載していますが、基本的には環境資源経済学や政策に関連する研究全般です。
- 4 申込上の主要な留意点 要旨は、研究動機(背景)、リサーチクエスション、分析方法、分析結果を、1000 word を上限に明記して下さい。

第2回東アジア環境資源経済学会大会について

日時： 2012年2月3日(金)・4日(土)

場所： Faculty of Economics, Padjadjaran University, Bandung, Indonesia

大会までの主要な日程

2011年9月1日(木) 報告要旨の提出締切

2011年11月23日(水) 早期登録の締切

2011年11月30日(水) 報告論文提出締切

2011年12月1日(木) 報告者登録の締切

その他 バンドンまでの交通手段・宿泊やその他の情報は、随時学会ウェブサイトでも更新していきますので、ご参照下さい。

学会ウェブサイト：<http://www.eaaere.org/modules/news001/article.php?storyid=1> また報告に関する問い合わせは、science committee 委員の森宛 (amori@gsges.mbox.media.kyoto-u.ac.jp) お願いします。

+++++

皆様の投稿をお待ちしています！

環境経済・政策学会ニュースレター 投稿規程(簡易版。詳しくは学会HPへ)

1. 【投稿資格】環境経済・政策学会員に限ります。
2. 【投稿記事の種類】(1)提言、(2)研究短信、(3)要望の3種類です。
3. 【記事の長さ・書式等】1つの記事は、原則として1500字以内とします。
4. 【記事の送付】下記の編集委員会宛に、電子メールでの添付ファイルとして送付してください。

問い合わせ及び記事の送付先：

〒305-8506 つくば市小野川16-2 独立行政法人国立環境研究所 社会環境システム研究センター
室長 亀山康子 e-mail:ykame@nies.go.jp

+++++

編集後記

東日本大震災の終わりは見えず、復興に向けて私もまた、微力ながら貢献していきたいと考えています。津波に流され九死に一生を得た岩手のおとしよりが「津波でんでんこ」と語っていました。津波のときはまず、それぞれが助かる道を考え、結果を非難しないという意味が込められています。難しい問題だと思いました。ゲーム論的な問題でもあり「カルネアデスの板」も念頭に浮かびました。重大事象に直面したときにどう行動するべきか、日頃から考えるようになりました。(T.W.)

編集

環境経済・政策学会ニュースレター編集委員会

亀山 康子 (編集委員長)

鷺田 豊明

有村 俊秀

栗山 浩一

発行

環境経済・政策学会

(Society for Environmental Economics and Policy Studies)

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町 194-502

学協会サポートセンター内 環境経済・政策学会事務局宛

電話 : 045-671-1525 ファックス : 045-671-1935

Eメール : scs@gakkyokai.jp

URL : <http://www.seeps.org>